



無視による無知

塚原, 東吾

(Citation)

化学, 79(11):20-21

(Issue Date)

2024-11-01

(Resource Type)

article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本記事は出版社の許諾を得て公開しております。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495794>



無視による無知

塚原 東吾

神戸大学大学院国際文化学研究科

何かを知らないことが罪になるとしたら、それは困ったものである。「知らなくたって仕方がないじゃないか」といえることもある。知らないとしていることが、社会的に広く共有されており、無意識のうちに共有している無知もしくは誤謬^{ごびゅう}であつたら、本当に仕方がない。

その常識は非常識？

だが、そうはいってられないこともある。ある社会で常識とされることについて「その常識は非常識」ということがよくあるからだ。いくら常識だからといって、差別や偏見に加担してしまった場合、知らないことをいいわけに、その罪が軽くなるわけではない。都合の悪いことを意図的に無視するというかたちで、広く流布している偏見に乗るのも、また無知の一形態だといえる。そのため「その常識は非常識」であることへの気づきが求められている。

日本の日常では、人種や民族、そして国籍などに関する話題は避けられがちで、いわば「寝た子を

起こすな」というのが大人の対応だとされてきた。つまり、偏見に気づかないふりをするのがよいとされている。それが「日本的」で「あえて事を荒立てない知恵」であるときえいわれてきたので、やんわりと、だが狡猾で陰湿に、差別や偏見が進められている。嫌だなあと思わされるのは、明らかな人権の無視があることを見るときや、たとえば外国籍の人はアパートを借りにくいなどといった事例が多発していることを知ったときである。ほかにもこういった、外国籍の人びとへの不都合なことがたくさんあるのに、メディアは避けている（つまり無知のままにしようとしている）ように思えるし、こちらも対応しきれない場合には、見て見ぬふりをしてしまいがちである。こういうことは、どう考えたらいいのだろう。

人種問題を「非人種化」したかたちで考えようとするのは、「カラーブラインド・レイシズム」と呼ばれている。たとえば、日本で外国籍の人がアパートを借りにくいという問題は、住宅問題や金額、不

動産慣習の違いなどのような問題に、また人権や偏見の問題は宗教の違いや習慣、言葉の問題に「すりかえ」られて、いつの間にかカラーブラインドのまま、忘れられるか放置されてしまう。よくても「たらい回し」にされる程度だ。

知ろうとしない態度

ミルズはこのようなことについて、アメリカのケースを分析している¹⁾。白人の男性が「想定されている社会」のマジョリティであり、中心であると想定しているため、性差別や人種差別が「例外的」なこととして扱われていることを批判している。ミルズはこのようなかたちで生まれてくる無知を、「白人の無知」と命名している。

ミルズの論点で大事なところは、マジョリティと想定された白人男性は、そういった差別や偏見を指摘しても、そのような見方をあえて避けようとする態度が広く見られると指摘していることである。

ミルズはこれを「無知」の分析と関連させている。すなわち、無知学の視点からの分析である。無知を単に「真なる知識の欠如」と消極的に規定することに対して、ミルズはそうではなく、「誤った信念」を含む「知ろうとしない」態度が問題の根源にあると主張する。そのようにして「無知(＝特定の問題の無視)」が現実の社会で生みだされていると分析しているのだ^{*}。

科学に潜む「無視」

これについては科学にも関係があることを指摘しておきたい。科

学研究の基本は、「徹底的に疑うこと」。つまりデカルト型の懐疑主義である。大事なのは、「そうである」と思い込んでいたことを疑うこと。そして、「すでに前提となっていること」に疑問をもつことだとされている。

しかし、物理学者ジョン・ザイマンが指摘したように、今や研究において前提や先行研究を疑うのではなく、それらをうまく受け入れて、そのなかでの「パズル解き」の手法(パラダイム的なパターン)を「習う」ことがよき行いとされるという。つまり、科学の手法が「懐疑主義から権威主義に」転換しているというわけだ。

そう考えてみると、ある意味では科学の現場でも論文生産に関係のないこと(つまり無駄な疑問の持ち方)をせず、紀要や二流のジャーナル(サイテーション・インデックスの低いもの)への投稿などはできるだけスルーする(無視する)というスタイルが日常的になっていることは、化学のラボでもとても現実的なことだと感じられるだろう。デカルト的に徹底的に疑うのではなく、論文を書きやすいように、テーマに対し都合のよい疑い方をして、本当に難儀な問題はうまく無視しておこう(それで論文生産性を上げていきたい)、というわけだ。

能動的な無知

これを考え直してみるなら、ミ

* ホセ・メディナはこの見解をさらに発展させた。知らないままの状態を指す「受動的無知」に対して、このように何かを知ろうとしないことを「能動的無知」と再定義している²⁾。

ルズのというような、あることについては「知ろうとしない態度」が起動されているといえるだろう。またそのようにして、ある意味でも賢い研究生活を送るという「能動的な無知」を発揮すること、つまりメディナのというような行動が実は推奨されている。そのような振る舞いを習うことで研究費も取りやすくなるし就職も早くなるのではなかろうか？

研究でのサバイバル競争やポストの獲得、つまりサイエンスの世界での就活には、かなり手の込んだ「能動的な無知」の活用が見られる。もちろん、これらすべてを否定するわけではないし、論文生産や就活にいそしむ院生諸君を可能な限り応援したい。だから、それでも「こういう厳しい世界だからなんとか内定をとれるようにがんばってくれ」とエンカレッジしたい。

だが、そういう意図した無知をうまく使ってくれとだけいったとしたら、それは片手落ちになる。無知学の世界では、このように社会的な差別や偏見、そしてサイエンスが今置かれた状況を分析できるが、そういう無知で世の中を渡り続けたら、それはそれでどうなのかを考えておいてほしい。そういう無知や無視をうまく使うことで君たちの人生航路は順調かもしれない。けれど、何か大事なことを見逃しはしないかい？と問い

かけておきたい。

あえて問い続けること

いうならば、こういうことである。君たちがラボで何かを無視することは、世の中の多くの人たちに迷惑をかけることにつながってしまわないだろうか。たとえばそれは、軍事的な破壊を進めていることにならないだろうか。もしくはラボでのブラックな働き方を受け入れることで、自分の首を絞めることにならないだろうか。管理社会や過剰な監視の網に絡めとられたり、ビッグデータやAIに踊らされたりしていないだろうか。貧困や差別をさらに進めることにならないだろうか。

ちょっとお節介のようだが、無知学は「そこまでいうか」といわれそうだけれど、そういう無知はかなり重大な問題につながっているのだということを、「そこそこ、いい貫く」。ソクラテスのように、現代のアゴラたるケミカル・ラボラトリーに集う、きわめて勤勉にして将来有為な若者たちの未来を惑わすような問いをあえてする。なぜならそれは、無知学の大事な役割の一つだからである。

参考文献

- 1) C. W. Mills, "Race and Epistemologies of Ignorance," S. Sullivan, N. Tuana ed., State University of New York Press, New York (2007).
- 2) J. Medina, "The Epistemology of Resistance: Gender and Racial Oppression, Epistemic Injustice, and the Social Imagination," Oxford University Press, New York (2013).

つかはら・とうご ● 神戸大学大学院国際文化学研究科教授, 1987年東京学芸大学大学院修士課程修了, 1993年医学博士(Ph.D., オランダ・ライデン大学), <研究テーマ>科学史, 科学哲学, STS(蘭学, 化学史, 気候再現など), <趣味>ブラタモリと孤独のグルメを合わせたような感じで行ったことのない街を歩くこと, 淡水魚の水中観察